

リモートセンシングの活用を

～「青天の霹靂」刈り取り講習会～

中南地域「青天の霹靂」生産プロジェクトチームと当JAは9月5日、平川市と田舎館村の2ヶ所で県のブランド米「青天の霹靂」の刈り取り講習会を開いた。刈り取りの遅れは品質低下を招き、被害粒や胴割粒が発生することから適期内に刈り取りを行うよう呼びかけた。

平川市の会場には生産者やJA関係者ら約40人が出席。中南地域県民局地域農林水産部農業普及振興室の中林光文主幹が講師を務め、生育状況や刈り取り適期のポイントを説明した。出席した生産者は「リモートセンシングを活用して刈り取り適期を確認する。また、天候などにも注意し、乾燥調製をしっかり行うことで品質を落とさないようにする」と話した。



青天の霹靂の刈り取り適期を学ぶ生産者



刈り取り作業をする工藤さん

適期収穫が大事

～「青天の霹靂」収穫開始～

当JA管内で県ブランド米「青天の霹靂」の収穫が始まった。JA管内では298経営体が栽培し、約6万8000俵（1俵60*₆₀）、特別栽培米は約3000俵の出荷を予定する。

同品種は、出荷基準を玄米タンパク質含有率水分15%換算で、6.4以下に設けている。生産者は、田植え前から土壌診断に基づいたケイ酸質資材や追肥時期の徹底、細かな水管理をし、徹底した栽培管理を行ってきた。

尾上基幹支店管内の工藤憲男さんは9月10日、「青天の霹靂」の刈り取り作業を行った。工藤さんは水稻約23.5%のうち10.7%で同品種を栽培する。高タンパクにならないようJAの指導員らと生育状況を確認し基本を守り管理をしてきた。「青森県唯一の特A米なので販売開始を楽しみにしてほしい。消費者の皆さんにたくさん食べてもらえれば一生懸命栽培している我々農家の励みになる」と話す。

令和元年産米出発

～「青天の霹靂」初出荷式～

JA全農あおもりは10月2日、平川低温倉庫で「青天の霹靂」初出荷式を開いた。生産者や関係者らが出席し、396俵（1俵60*₆₀）の初出荷を見守った。

全農あおもり運営委員会の酒井一由副会長は「本年も特Aの取得は確実と思っている。全国の消費者に愛されるようにPRに努めたい」と意気込みを話した。

代表者5人がテープカットをした後、県内や首都圏へ向けて出発したトラックを見送った。

令和元年産米の「青天の霹靂」は、全国で10月5日より販売を開始した。



テープカットをする代表者